

# 伝統染織活動を通じた子育て環境の創造 － 幼児教育機関を軸とした市民協働 －

研究組織：教育学部 准教授 佐々木和也（代表）

エコ・ハウスたかねざわ 野村 恵子（NPO法人ふるさと未来 Sou）

高根沢町住民生活部環境課 岡本 英男

協力：社会福祉法人陽向「陽だまり保育園」、フリースペース・ひよこの家、桑窪花づくり女性の会

## 事業の背景・目的及び意義

エコ・ハウスたかねざわは、高根沢町（環境課管轄）の環境学習の拠点として環境学習・リサイクルショップ・資源ごみ回収機能等を有している。H23年度から、指定管理者としてNPO法人ふるさと未来 Sou が企画運営を行っている。

申請者はこれまでエコハウスと連携し、伝統染織を中心とした環境・E S D学習プログラムを開発し、定期的な学習会（里山文化の会）を通して、地域住民に環境啓発を促してきた。この資産を生かして、2008年度より、幅広い世代で伝統的な和綿の栽培を通して地域を活性化する活動を、在宅介護支援センターの農地を利用して展開してきた。この事業を通して、町の不登校児童・生徒の居場所フリースペースひよこの家、地域の保育園と連携体制を築き、家庭内で伝承されてきた和綿文化を地域モデルとして、地域創造に関わることでできる市民の育成に寄与し、当初の目的を達成できた。

本年度より、地域再生の拠点として注目されている幼児教育機関と連携し、地域で子どもを見守り、育てるといった伝統的なスタイルの再生を目指す。自然遊びや体験の低下が著しい現代、子どもの豊かな発達を保障する環境「子育て環境」を市民が協働して創っていく観点は重要である。そこで、本年度より3年計画で、NPO法人ふるさと未来 Sou の自主活動グループ「里山文化の会」が陽だまり保育園と連携しながら、地元の里山環境で藍を栽培し、藍染活動を展開しながら地域交流体制づくりを行い、保育園が果たすべき地域貢献機能を探求する。最終的には、町内の保育園・幼稚園が本事業に共同参画することで、里山の魅

力を伝承するための啓発活動の基盤づくりを目指し、町の子育て環境の創造および環境学習の充実を図っていくことを目標とする。

## (1) 伝統染織を活用した幼児教育のための環境教育プログラムの開発

里山文化の会が蓄積してきた伝統染織に関する資産を、幼児教育に活用するための環境教育プログラムを保育園と共同で開発する。高根沢町の資産である豊かな自然環境の保存と継承に資するため、とくに生物多様性の視点から「藍」を活用したプログラムを中心に開発し、幼児期のCEPA活動のあり方を検討する。

## (2) 保育所を拠点とした地域協働モデルの創造

今後の保育所には多様な機能が期待されている。(1)のプログラムの実施を共有化することで、地域の子育て文化を醸成するためのコミュニティ形成を図る。子育て世代はもちろんのこと、地域の市民や関係機関など様々な主体が参画し、協働していくことで地域の子育て環境を創造していく担い手の育成につなげていく。

## 進展状況

### (1) 協働体制づくりの途中経過

高根沢町は中山間地域という立地条件には満たないが、農業が主たる産業であり、里山の定義に該当する田園風景を維持している（市街化調整区域の線引きは以前厳格である）。本研究では、高根沢町東部の南北に走る喜連川丘陵沿いに広がる里山をターゲットとしている。

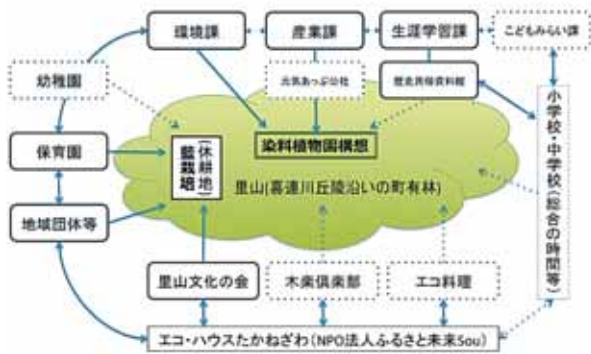


図1 本事業の協働体制ビジョン

ここでは、7年前より5年間農地・水・環境向上対策事業（農水省予算、町産業課管轄）が地域住民によって実施された。このなかで、休耕地を活性化させ、なおかつ地域の特色創出事業として、藍を栽培して、藍染活動を通してコミュニティを形成することが町に提案された。当時、本事業のアドバイザーを務めていた筆者が支援し、千葉藍を少量であるが染料店に流通させることで、持続可能な活動とすることができた。この団体が事業終了後も活動されていることから、幼児教育機関の里山活動の支援を依頼し、協働体制づくりの核とすることができた。

次に、元気な森づくり県民税を活用した里山整備事業が産業課管轄で行われており、エコ・ハウスが森林関連のプログラム作りと実施を請け負っている。3年前より、生物多様性を普及啓発するために、里山文化の会が中心となり、間伐された里山に染料植物を植樹し、染料植物園構想をSouが総括しながら進めている。この計画と本研究を最終的には統合し、環境・E S D学習を軸とした地域協働を創造していく長期ビジョンをもっている。

本年度は、7園（内公立が2園）ある保育所から、これまで実績のある陽だまり保育園年長組、地域団体として上述の地元グループ「桑窪花づくり女性の会」そして里山文化の会の協働体制づくりを、以下に述べるプログラム試論を通して確立した。

## (2) 教育プログラムの試論過程

### (a) 環境プログラムの視点

1997年の「テサロニキ宣言」において、環境教育は「環境と持続可能性のための教育（E S D）」と表現してもかまわない、と明文化されたことで、環境教育の内容として環境だけではなく貧困、人口、健康、食糧の確保、民主主義、人権、平和をも包含するビジョンが示され、E S D的な環境教育への質的変換が要求されるようになったといえる。2007年の第4回国際環境教育会議における「アーメダバード宣言」において、「E S Dを通して、文化的な多様性を尊重ようになること、思いやりのある社会を創ること、そして平和裡に暮らすことです。昔ながらのローカルで伝統的な生活様式から学ぶことにより、地球や生命が維持されているシステムを慈しみ、敬意を表するようになりますし、こうした知恵を急速に変容していく世界に適用することもできる」こと等を学べるとしている。下線部を教育目標と捉えると、生物多様性条約の目指すべき社会像と一致する。持続可能な社会の構築を考えたとき、人間が環境による創造物である以上、生活基盤である環境資源である自然の恵みに依存せざるをえず、「いのちのつながり」に敬意を払える市民教育を目指さなければならない。この最も基礎的な部分を担うのが幼児教育であるため、生物多様性を意識した保育プログラムとすることを意図した。なお、これは筆者の大学院教育研究活動で蓄積した資産の公開である。

### (b) 生物多様性を取り入れた保育とは

生物多様性は、生物学的多様性を意味する用語で、米国研究協議会による生物学的多様性フォーラムの計画（1985年）に、Rosenによって造語された。ロジカル（論理）を抜くことで、理屈よりも一般普及を目的とした宣伝用語とされる。その後、1988年のIUCN総会で使用され、それまで種の絶滅が主たる関心だった保護活動から、生物を群集・システムとして捉えて、その全体像を保全する方向転換がなされた。

生物多様性の一義的な定義はないが、以下の三段階の多様性が一般的となっている。

- 遺伝的多様性：同じ種間で個体間の違いと、  
個体群間の違いがある
- 種の多様性：多くの種が存在する
- 生態系の多様性：遺伝子が究極的に寄与する、  
異なった諸過程の豊富さ

このような階層的な多様性が豊かな自然環境を創り出し、そこから様々な恩恵を受けて人類は豊かな福利を得ているという概念こそが生物多様性である。このように、多様な生物に支えられた生態系から受ける恩恵を生態系サービスと呼ぶが、本研究では幼児期で扱うため「自然の恵み」と表現することとする。

幼児期の環境教育のあり方について、様々な立場から実践が行われているが、次の4つに大別される [1]。

- ① 自然体験が重要
- ② 自然体験だけでなく生活体験も含めた生活全体での取りくみが必要
- ③ 自然体験・生活体験に加えた共生体験
- ④ 「環境を通して行うもの」という保育の基本そのもの

これらには、それぞれ課題が指摘されているが、結論的には③や②あたりの立場から、子どもの主体性を活かし、広い視野を保って流動的に保育に挑めることが求められると言える。

また、環境教育は、図2に示すように、発達段階に応じて重視すべき課題の比重を変えていくことが有効であると指摘されている。幼児期には、自然（環境）や人間（社会・文化）の中において

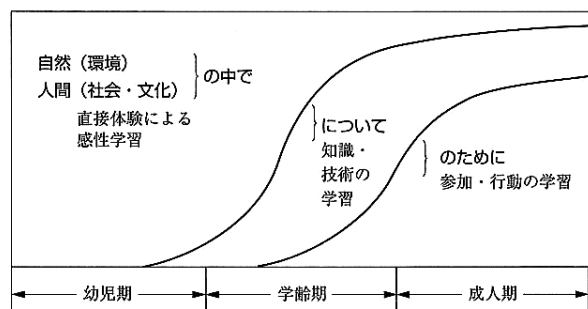


図2 発達段階にあった環境教育 [2]

直接体験による感性学習が重視されるべきとされる。ただし、ここでいう「感性」は発達段階から考えても、価値判断を含む関係性創造能力としての感性というよりは、もっとプリミティブな感受性（五感）を刺激する直接体験学習と捉えるべきであろう。

しかし、あらゆる自然環境・自然現象は子どもの興味を刺激してやまないが、ただその中に放つだけでは環境教育としての目的を達成することは難しい。そこで、生物多様性がいう「つながり」と「個性」を感じ取ることで、子ども自身から発した環境観や世界観の広がりを支援していくべきであると考え、図2に示すような保育概念を構想した。

子どもにとって、初めての他者は母親だとも言われるが、ここでは幼児期において子ども自身が認識しやすい自然環境的要素として、身近な生物から始まる構想とした。ここには土や水などの非生物的な環境要素も含める。これらには存在するだけで子どもを引き付ける力が備わっているという意味で、等しい価値を持っている。このような自然環境の中で生活し、自らそれら自然に働きかけることで安心感を得たり、好奇心を刺激されたりすることができる。幼児期の共感性はそれら生物の持ついのちを、直観的に感じ理解することができる。アニミズム的感覚も強く、実際にいのちがないものでも構わないのも特徴である。ある生物と関わっていると、大抵他にも興味を引く生物が近くにいることに気付く。花を摘んでいけばチョウを見つけられるように。そうした生物同士のつながりを意識できるようになると、自分以外の「いのち」を次第に客観的に見ることができてくる。他者の思いを推し測り「相手の立場に立つ」ことの基本である。しかし、自分を主張したい時期でもある、個と集団の間で葛藤し、人間（社会・文化）の中で様々な体験をしていくことで仲間ができていく。阿部 [3] の言う直接体験による感性学習を進めるためにも、幼児期はこうした二人称関係までの充実を図る必要がある。

こうした関係を充実させた地盤の上に、就学後に身につける知識・技術の学習を通して、第三者的なヒトとヒトの関係や、環境との関係など、高次元の構造を理解できるようになっていく。

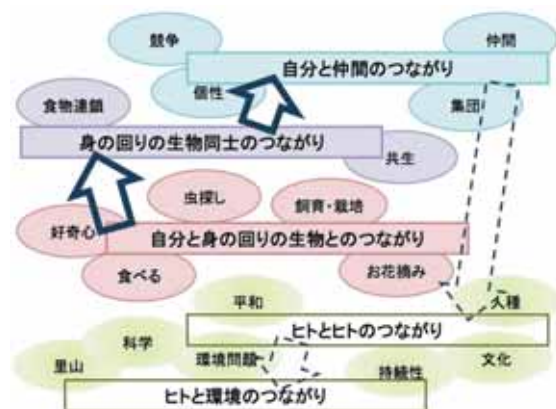


図3 生物多様性の視点を取り入れた保育概念

### (c) 藍染を取り入れる意味

藍は紀元前5,000千年前に既に利用されていたとされる。日本には飛鳥時代に中国大陸を経て伝わり、古くから染料植物として栽培されてきた。この藍が庶民文化として定着するのが、木綿が庶民にも解禁された江戸中期以降である。着物はもちろんのこと、婚礼布団や風呂敷等、生活道具を彩る花形としての実用美が、ジャパンプルーという代名詞までも生んだのであろう。そして、藍単独で何色にも染め分け、それぞれに自然観豊かな色名がつけられている。最も薄い藍色から、「瓶覗（かめのぞき）・水浅葱（みずあさぎ）・浅葱・納戸・縹（はなだ）・紺・褐色（かちいろ）」といった具合である。このように藍で青を染め分け、各々に美しい色名を与える文化は、まさに前述した日本的感性により生み出されてきたと考えられる。さらに、藍染は建染という染色法に属し、伝統的な天然発酵染は発酵菌の作用によって、藍（インジゴ）を還元して染めるという神秘的なものである。目に見えない自然界の力に依存しなければならず、共生という概念を汲み取りやすい対象でもある。ここに、生物多様性の感覚的理解を促すポテンシャルがある。

### (d) 今年度の活動（地域連携部分を中心に）

#### ○日下田紺屋見学（2013. 6. 6）

江戸時代から続く紺屋「日下田藍染工房」（益子町）の日下田正先生と連携し、家業としての藍染を体験させる場を設定した。県の文化財指定を受ける茅葺屋根の染め場に入ると、すくも藍と火壺からの煤の香りで独特の雰囲気包まれます。引き継がれてきた家業としての履歴の重さを引率の保育士が感じることも大切である。藍染め作業に目を凝らす子ども達…本物の仕事には言葉など無用であり、これから始まる自分たちの藍の活動を五感で受け止めてもらうことをねらっている。

#### ○千葉藍づくり（2013. 8. 27）

春先の根切り虫、そして再定植後の雑草との戦いを経て立派に成長した藍。保育日程の関係上、お盆を過ぎても一番刈りをしていなかったため、所々花芽が出てきてしまった。

桑花づくり女性の会、里山文化の会との新たな協働である千葉藍づくりを行った。早朝から大人は鎌、子どもは手で約1畝分の藍を採集し、保育園に移動して黙々と葉と茎を分けていく。子ども達だけ、あるいは大人だけでやっていると、とても辛い作業であるが、大人と子どもが協働することで、それぞれに異世代交流の効果が出て、退屈せずに収穫したすべての藍を千葉藍にすることができた。筆者にとっては、保育園での藍染活動として7年目となるが、新たな協働創出によって、保育園でのスクモづくりを展開することとした。



図4 協働による藍の収穫



図5 異世代間交流効果も大きい



図6 葉を天日に干す指導も地域力に任せる

早朝8時から始めてから午前中4時間。保育前期の5ヶ月目のプログラムとしては多くのことを子ども達に要求する内容である。しかし、ここに地域という要因が入ることで、退屈せずに、また学び合いが促進される機会となった。図5や図6に示すように、活動の中で自然に生まれるシーンを大切に見守るのも、地域連携を取り入れたときの保育では大切である。



図7 達成感一杯の記念撮影

### ○学びを地域へ還元 (2013. 9. 18・20・26)

毎年10月に前半保育(生活)の集大成を発表する運動会が開催される。そこで、全クラスのTシャツを草木染で実現しようと、地域連携事業の一環としてプロジェクト化を試みた。里山文化の会のこれまでの活動で習得してきた染色技術を地域に還元するという側面を、保育園の願いにマッチングさせたかたちで構想した(詳細は添付資料参照)。



図8 会員と保育士による染色で会話ははずむ



図9 媒染作業に興奮する園児(年少組)

平日活動となり会員を集めるのが大変であったが、保育士や子ども達との協働から生まれる会員のやり甲斐は、生涯学習の更なる動機となることを、会員インタビューから確認できた。保育の観点では、各発達段階でできること、できないことの差が大きいですが、豆汁処理は自分たちでトライしたり、媒染作業に参加したり、まだ染色風景を見るだけだけど、染料となる雑草を探して採取したりと、それぞれに関わりを持てるのが伝統染織の保育教材としての魅力の一つである。

### ○自家製スクモと藍建て（2014. 2. 12・27）

夏に収穫した藍の乾燥葉を年末にかけてスクモ化に挑戦した。晩秋から始めたため、なかなか発酵が安定せずに四苦八苦したが、この作業がうまくいかないと、自分たちの卒園製作や卒園証書が藍色にならないことを認識していたか、一生懸命に毎日発酵臭と格闘しながら攪拌をしてくれたようだ。図10に藍建て直前のスクモの様子を示すが、製藍工程で水分が多かったため、保管の過程でカビが多く発生した。天日乾燥を入念に行うべき結果となった。また、発酵状態も甘く、スクモ化に関しては研究の余地を多く残す結果となった。



図10 自家製スクモに白カビが発生

そして、寒中藍建て…無事に自家製スクモで建てられるか園児も筆者も不安に包まれていた。こちらも発酵がなかなか安定しなかったが、藍建てから10日後に、卒園製作用の布を染めてみた。藍瓶に勢いがなかったので、後日再度の染色を行った。藍染前半活動では筆者らが染色補助に入るが、自分がつけてきた力を総動員して、補助なしで染める姿から成長をひしひしと感ずることができた。

### 事業の成果

本年度は、初年度ということもあり、体制づくりと協働作業の段取りがなかなか思うように進まなかった。しかしながら、これまでの連携事業、その他の社会資本を活用すること、さらに、別事業との統合を図ることで、図1で示したビジョンを関連する組織に周知することができた。来年度以降は、図1で示した破線部分（連携が不十分、

あるいは現状ではない）を強化することで、本研究の目標を達成するに留まらず、将来性のある地域連携活動に育てていきたい。また、陽だまり保育園以外の幼児教育機関との連携模索が重要となる。こちらについては、エコ・ハウスたかねざわ並びに環境課との連携で、私立保育園と公立保育園に活動協力要請を進めている最中である。

プログラムの試論については、筆者ならびに里山文化の会で蓄積してきた染色教材を活用する観点で行った。陽だまり保育園とはこれまでの協働関係もありスムーズであったが、次年度以降の取り組みの中で、その汎用性や課題を見出して、改良をくわえながら進めていきたい。

なお、本研究の一部は、天然染料顔料会議第10回広島大会にて発表した。



図11 無事に建った藍瓶



図12 補助なしでの年長児の藍染



図13 空気で酸化



図14 染色途中の布



図15 最後は種取りで次年度へ継承される

#### 参考文献

- [1] 井上美智子：幼児期の環境教育普及にむけての課題の分析と展望、環境教育 Vol.14、No. 2、pp.3-14、2004
- [2] 阿部 治著：こどもと環境教育 東海大学出版会、1993
- [3] 山崎 和樹：藍染の絵本 農文協、2008
- [4] 北澤 勇二：染太郎の口伝帳 免許皆伝の巻 ラフトゆう、2009

#### 情報公開

本研究の取り組みの一部は、以下のサイトで公開しております。

※宇都宮大学教育学部衣生活環境学

Facebook Page

<https://www.facebook.com/uuenv>

宇 都 宮 大 学 地 域 連 携 事 業 2 0 1 3

伝統染色を通じた地域への還元

## 第10回陽だまり運動会の晴れ着に寄せて

CONTRIBUTION TO OUR CHILDREN'S MEMORIES



NPO法人ふるさと未来SOU「里山文化の会」

宇都宮大学教育学部衣生活環境学研究室

高根沢町環境課

プロジェクト代表

佐々木和也



## 私たちの願い

### 草木染への思い

今年度から新たな地域連携事業「伝統染織活動を通じた子育て環境の創造－幼児教育機関を軸とした市民協働－」に取り組み始めました。これまで、エコハウスたかねざわで蓄積してきた草木染の資産、そして陽だまり保育園で行ってきた藍染活動で得てきた保育資産等を結びつけ、幼児教育における環境教育プログラムを開発し、それを通して保育園という公的機関を活用した子育て環境を地域の多様な団体個人との協働で創造しようという試みです。

3.11以降、わたしたちは自然との関係性を見直さなければならないと感じているはずですが。土間ホールの照明を彩る布の染色作家である斎藤洋さんは、40年間ずっと化学染料で引き染めをして作品を世に送り出し、生計を立てておられた方です。しかし、東日本大震災を境に反原発運動と化学染料の関係性に疑問をお持ちになり、現在は化学染料と決別して草木染に回帰されております。今回ご縁があって彼の仲間と一緒に、震災チャリティコンサートの直前に陸前高田と大槌町で染色の世界から復興支援を試みて参りました。その中で、草木に切り替えてから、その土地での植生や文化、そこに住まわれる方々が持ち寄られる染料との出会いが「野染め」（野外で布のキャンパスに刷毛で色をつけていくワークショップ）に加わり、また草木を通して人とのつながりができていくということ、印象深く語られていました。現代的な「もの」には私たちが「直接的に」関わることはできません。しかし、伝統的な「ものづくり」には多くの人々が関与することができます。ここに、草木染の現代的な価値を再生する意味があると思っています。里山の生活文化を染織の視点から長年見つめ直してきた資産を、地域連携事業の一つとして地域に還元する機会にしたいと考えました。お手伝いいただいた皆様に心よりお礼申し上げます。

### 保育への願い

毎年、この時期に運動会に合わせて「晴れ着」（勝負Tシャツ）を染めています。大空組の藍だけでなく、すべてのクラスカラーを天然に切り替える必要性をずっと感じていました。そこには、天然の色と付き合うことのスローな感性を子育ての中で親子で楽しんで欲しい、儂い天然の色の現代的意義を保育に重ねて欲しい、儂いからこそ、そこに込められた願いを忘れないで欲しい・・・という思いがあります。晴れ着を「つくる」プロセスを通して育まれる感性そのものが、震災復興や自然(いのち)に寄り添う感性であるように思えてなりません。

「手間」をかけることの意味；「手」と「手」の間、「自己」と「他者」の間、「自己」と「自然（環境）」の間を「結ぶ」行為そのものです。それを伝統的に行うには「ひま」が必要になるのは当然のことです。しかしながら、今の生活には「ひま」のもつ空間性が受け入れられないのです。でも、保育はそこに価値を見出していく必要性を感じます。そもそも、「ひま」は「ひび割れ」を意味する「ヒ」と「ヒ」を結ぶ意味に使われていた言葉です。それが「暇」という時間性だけの意味に変化し、現代では時間概念でしか捉えられなくなりました。私は「手間ひま」をかける価値を説明するには、その空間性の再認識が必要だと思います。現代人あるいは現代社会が喪失した空間性、自己と自然の関係性の間に「ひび割れ」が生じているにも関わらず、技術に依存したリスクを振り返ることなく、経済優先の生活を貪り続けているからです。このような環境で育たなければならない子ども達を支援するには、やはり「手間ひま」をかけることしかないような気がします。今年の晴れ着と子ども達の達成感を讃えるメダルの糸に、そんな大人の願いが込められていることを、運動会という瞬間の記憶とそこに向ったプロセスの中に留められれば幸いです。



タデアイ *Polygonum tinctorium*



ベニバナ *Carthamus tinctorius*



ニホンアカネ *Rubia akane*



セイヨウアカネ *Rubia tinctorum*



クチナシ *Gardenia jasminoides*



スオウ *Caesalpinia sappan*



ヤマモモ *Myrica rubra*



コブナグサ *Arthraxon hispidus*



五倍子 *Slechtendalia chinensis*

### 染料とした草木たち

大空組もちろん7代目になった蓼藍。今年はスクモづくりにも挑戦しています。夢組だった頃から見続けてきた子ども達が、大空組として関わってくれていることに、続けることの大切さを感じています。虹組は新園舎になってからの陽だまりカラーとなった土間ホールの登り壁の赤。園庭にも植えてあるヤマモモの茶味がある黄色に、スオウの赤を重ねて表現しました。風組は空色が子ども達の願いでした・・・苦心の末、梔子から抽出されるブルー液を利用して、秋の空のように透き通った青を表現してみました。同じく、若葉の緑にも下地として青を濃く染めて、黄八丈の黄色として有名な小鮎草を重ねました。小鮎草は保育園周辺にも自生していて、今回は若葉組がすべて自力で採取してくれました。大地組は大地に根をはるというイメージから、茜を使いたいと考えました。そして、日本茜は日本の緋色を染めてきた伝統ある赤です。残念ながら、それだけで染めることはできずに西洋茜を利用しました。しかしながら、大地組として600グラムもの日本茜を採取していただきましたので、サプライズを用意しました。当日の晴れ着にご注目ください。そして夢組ですが、紅花にこだわりました。金一斤紅一斤と江戸時代では大変高価であったのですが、産着に疱疹などの病から守るものとして染められました。生まれたばかりの弱々しいのちを、天然染色のなかでは最も儂い紅木綿色で守ろうとした先人の願いを知ってもらいたかったのです。最後に、メダル用のリネン糸は五倍子という虫瘤で有機媒染(タンニン下地)をするという目に見えない手間をかけています。晴れ着のTシャツも子ども達が豆汁処理をするなど、保育の中で手間をかけてもらっています。